

― 私の文学館散歩 (六) ―

逗子・葉山に鏡花の足跡を探す

松村 茂治

はじめに

今回の散歩コースに逗子・葉山を選んだ第一の理由は、新型コロナ禍で県外には出にくいという事情があったからである。そして、この春、澁澤龍彦が生前に企画した泉鏡花のアンソロジーが出版されるといふ案内を見て、書架にあった「春昼・春昼後刻」「草迷宮」を手にしたことが、当地訪問の直接的なきっかけとなった。

金沢・鏡花記念館

もちろん、鏡花を取り上げるなら、逗子・葉山ではなく、金沢でなくてはならないことは承知している。浅野

川からそれほど遠くない泉鏡花記念館に立ち寄ったのは、所属していた学会が金沢で開催されたときで、調べてみると、それは一九八五年、三十五年も前のことになる。記念館は、その佇まいから、鏡花の旧宅を記念館用に改築したものと思っただけで、そうではなかった。生家は、すでに明治時代に火災にあって焼失しているとのことである。

金沢と言えば泉鏡花という対連合が出来ていたことはあるが、それほど熱心な読者だったわけではないので、どのような経緯で記念館を訪れることになったのかはつきりしない。おそらく、この日の夕方、京都で妻と落ち

合うことになっていたので、列車時刻から逆算して、ここに寄ることに決めたのではなかったか。もともと、その後間もなく、岩波書店から復刻された鏡花全集(全二十八巻)を購入しているの、鏡花が気になる存在であったことは間違いない。

そういう状況なので、真の鏡花ファンには蟹壺をかうような話になるが、記念館よりも、そこから駅に向かう途中で見つけた九谷焼の赤絵のコーヒー茶碗の方が記憶に残っている・・・と言うより、これが唯一の金沢の思い出の品で、器は、美術品というのではなく、生活雑器の部類に属するものであるが、飽きの来ない色合いと図柄、大きさ、掌への納まり具合、口にあてたときの微妙な感触・・・こういうのが名器として後の世に残るのではないかと思ひながら毎朝使ってきた。ただし残念なことに、形あるものの宿命と言ったらいいのか、気づくと二つ揃いの双方の内側に、うっすらとひびが入っている。それでも他の器に替えるつもりはなく、コーヒーを注ぐ度にパリッといきはしないかと緊張しながら、数年が過ぎた・・・。ああ、九谷焼ではない、鏡花の話だった。

明治六年、金沢市で生まれた彼は、十八歳になると尾崎紅葉を訪ねて上京している。門下生になることを許さ

れ、小石川や牛込に住んでいたが、三十歳を過ぎて二回、静養のために逗子を訪れている。その間、「通夜物語」「湯島詣」「婦系図」などの作品を発表しているが、滞在していた逗子・葉山を舞台にしためぼしい作品といえれば、「春昼・春昼後刻」と「草迷宮」くらいではないだろうか。そこで、この二作品を手掛かりに、三浦半島に散歩に出かけてみようと思っただのである。

「春昼・春昼後刻」― 逗子・岩殿寺 ―

現代日本文学大系5(筑摩書房)の年表によれば、鏡花は明治三十五年七月から九月までと、明治三十九年七月から明治四十一年二月までの二回、逗子に滞在している。滞在先はいずれも、現在の京急・逗子線の逗子・葉山駅近くようだ。「春昼・春昼後刻」は、二回目の滞在時に書かれたものと思われる。

進行役の散策子(鏡花)は、おそらく現在のなぎさ通りから県道・金沢逗子線を経由して、この日の目的地「岩殿寺」に向かったのではなからうか。途中で、畑仕事をしていた農夫を見かけて声をかけたのは、県道から脇道へ逸れ、岩殿寺が大分近づいた辺りである。声をかけたのは、今し方通り過ぎた屋敷の中に、青大将が入っ

て行くのを見かけたからで、そのことを家の人に言っ
てもらおうと思ったのである。その記述の具体的なところから、散策子は、実際に蛇を目撃したのではないかと想像する。

「・・・今彼処の横手をこの路へかかって来ると、溝の石垣の処を、ずるずると這ってね、一匹いたのさ——長いのが。(中略)やがて半分ばかり垣根へ入って、尾を水の中へばたりと落として、鎌首を、あの羽目板の中へ入れたるうじやないか。羽目の中は、見た処湯殿らしい。それとも台所かもしれないが・・・」
(10頁)

この屋敷が現在のどの辺りにあったのか、作品から特定することは難しい。蛇に会った屋敷の角を曲がると麦畑が広がっていたということになっているが、地図を見ると、今や辺り一帯は住宅地となっていて、麦畑を思い浮かべることは難しい。
屋敷への言づけを残した散策子は、目的地へ向けて歩を進めるのだが、辺りを真っ黄色に染め上げている菜の花畑にさしかかると、そこで、もう一度歓迎を受ける。

「・・・ここに！」と指さし、妻が「ひゃっ」と言って飛び退いたとき、その小さな影は、足下の暗渠を覆っている鉄製の格子の中に素早く消えていった。薄茶色の、子どもは、蛇と蜥蜴の違いはあるが、こうした仲間たちが出迎えてくれるというのは、鏡花の足跡を巡る散歩としては、この上ない幕開けであった。

作品の中で散策子が目指したのは、そのすぐ先、「・・・樹の枝から梢の葉へ捌んだような石段で、上に、茅ぶきの堂の屋根が、目近な一朶の雲かと見える。(中略)それが久能谷の観音堂」(15頁)であるが、そこが「岩殿寺」の一隅であるということは、文庫本でさらに十頁ほど先にいかないと分らない。

蜥蜴の消えた暗渠にかけられた蓋を辿るようにして行くくと、間もなく「岩殿観音」と刻まれた大きな石碑の前に出た。そこを過ぎると山門が見え、その先に作品に書かれたとおり、木立の間を貫くような急な石段が見えてきた。

石段は風化によると思われる摩耗が烈しく、造られてから長い時間が経過していることを物語っていた。急な

「・・・いま一人の足下を閃いて、輪になって一ツ刻ねた、朱に金色を帯びた一条の線があつて、赫耀として眼を射て、流のふちなる草に飛んだが、火の消ゆるが如くやがて失せた。

赤棟蛇が、菜種の中を輝いて通ったのである。」
(15頁)

このヤマカガシは、実在のものだろうか、想像の産物だろうか。その出方がやや芝居がかつた感じがするので、おそらくこちらは物語の構成上生み出されたものだろうと理解する。いずれにしろ、二匹の導き手により、我々は鏡花世界に入ることができるのである。

猛暑だった夏も終わりを告げた九月末、岩殿寺への散歩を試みた。秋晴れの下、涼しくなったとはいえ、少し歩いただけですぐに汗ばむような陽気の中だった。なぎさ通りから県道へと、散策子と同じ道を経由し、そこから脇道に入って、間もなく寺の石段が見えてこようかという所で、私たちも思わぬ歓迎を受けた。少し前を歩く妻の足下に、動く小さな姿を認めたのである。私が「あ

登り下りを助けるためにつけられた手すりにはサビが浮き出していたが、手入れが行き届いているようで、握っても手が赤くなるようなことはなかった。石段は、百段ほどあつたろうか。登り切って振り返ると、木の間越しに逗子の町と、その先に秋の日を受けた逗子の海を見渡すことができた。

登り切った少し先に観音堂があり、お堂に向かつて右側に小さな池が掘られていて、「鏡花の池」と書かれた小さな石碑が立っていた。池は、元々あつたものなのだろうか、鏡花を記念して造られたものだろうか。

お堂の梁や軒、壁には、無数の千社札が貼られていた。どれも貼られてからかなりの時間が経っているらしく、文字が薄くなっていたり、紙自体がはげ落ちていたりするものばかりだった。目を凝らして、散策子が見つけた「玉脇みおの懐紙」がないかと探したが、もちろん見つけることは出来なかった。

散策子がお堂の柱に貼られていた懐紙に書かれている歌に気づいて読んでいるところに住職が現れ、歌にまつわる悲劇が語られたのだった。「春昼」は、悲恋の一方の主人公、この寺に仮寓していた「男」についての、

住職による語りという形をとって進められる。懐紙に書かれていたのは、次の歌である。

「うたた寝に恋しき人を見てしより

夢てふものは頼みそめてき

― 玉脇みを ―

はじめこの歌は、玉脇みをの作と受け止めたが、そうではなかった。浅学を告白することになるが、「そめてき」の意味がよく分からなかったので、手元にある古語辞典（三省堂）を開いてみた。すると、「そむ」のところに「・・・し始める。」とあったので、「見初める」と同じ用法かと納得したのだが、その用例として、この歌が引用されていたのには驚いた。作者は、小野小町とのことである。作者からも、歌の内容からも、きっと高校生でも知っているような、有名な歌なのだろうと思うと、改めて不勉強を恥じるのである。

この小町の歌に自らの思いを込めたのが、悲恋のもう一方の主人公、玉脇みおである。

ところで、「岩殿寺」は、何と読むのだろうか？

ていたので、そのうちの「逗子より」を開いてみると、そこには、「・・・久野谷なる、岩殿寺のあたりに候。土地の人はたゞ岩殿と申して、石段高く青葉によづる山の上に、観世音の御堂こそ・・・」とあり、「いわと」が正式名称で、「いわと」が俗称ということになるようで、ますます謎が深まるのである。

お堂の前を行ったり来たりしていると、地元の人と思しき男性が上がって来て、お堂の前で手を合わせ始めた。お参りが終わるまで少し待って、「このお寺は何と呼ぶのでしょうか？」と尋ねると、即座に「ガンデンジ」との答えが返ってきた。彼はこの寺の檀家ということだから信用できると思ったものの、途中にあった大きな石碑に彫られた「岩殿観音」について尋ねると、「イトノカノンかなあ」と、自信はないようで、「下の庫裏に住職か奥さんがいるので、聞いてみたらいい」と教えてくれた。「それよりも、お堂の裏にあるご本尊は知っているの？」というので、「知らない」と応えると、その前まで案内してくれた。それは、岩盤に掘られた、小さな祠で、元々はもつと大きな岩窟だったが、崩れて大分小さくなってしまったとのことだった。ご本尊が、お堂

以前、逗子に住む知り合いに、「イトノデラは、今でも逗子にあるの？」と尋ねると、一瞬、間をおいて、「ああ、ガンデンジね、あるわよ」との返事が返ってきた。中央高速の大手の手に、同じ漢字を使って、「いわとの城趾」があるので、同じように訓読みで聞いたのだが、まさか音読みで返って来るとは思わなかった。きっと正式名称ではなく、地元での俗称なのだろうと思うのだが、気になって、「春昼」を開いてみると、岩殿寺には「いわと」とルビがふられていた。「いわとの」ではなかったけれど、音読みはあり得ないだろうとの思いは間違いではなかったようだ。

しかしながら、今回の散歩の準備に、手元にあった三浦半島のガイドブックを開いてみると、お勧めの散歩コースの一つにこの寺が入っていて、はつきりと「がんでんじ」とのルビが振られている。さらに、逗子市立図書館発行の「季刊マーメイド 第2号」には、「『がんでんじ』というごつごつした感じのよび方ではなく、鏡花のように『いわとでら』『いわとのでら』と言いたくなります」とあるので、どうやらガンデンジが正式名称のようだ。

さらに、同館報に逗子に言及した鏡花作品が紹介され

の中ではなく、お堂裏のガンクツのデンドウにあるので、やはり「ガンデン」が正式名称なのかもしれない。

小町の歌は、人妻である女主人公が自分の気持ちを込めて堂に貼ったものだが、男との間にどのようなやり取りがあつたのか、作品では明らかにされてはいない。おそらく二人は手も握ってはいないのだろう。すれ違っただけ、あるいは遠目に見つめ合っただけで、互いに焦がれ死にするような恋に落ちたことのようなのだ。

この出会いは、同じ作者の「外科室」と同じである。医学生・高峯は、友人と出かけた小石川の植物園で、美しい女性と出会う。互いに連れがあり、言葉を交わすこともなかったが、この一瞬の出会いが、互いの心に忘れたい印象を残した。十年近く経って、片や医師、片や伯爵夫人となって、つまり、医者と患者という立場で相対することになるのである。

別れるときは違つて、恋のはじまりには特に理由は要らないのだから、多少荒唐無稽な出会いでも目を瞑れということなのかもしれない。ともかく、二人は恋に落ちた。

そしてある日、「男」は、お堂の裏山の方から聞こえてくる村祭りのお囃子やざわめきに誘い出され、けもの道のような谷合の道の草を踏み分け、音のする方、火影の濃くなる方を目指して進んでゆく。

「・・・海の方は、山が切れて、真中の路を汽車が通る。一方は一谷落ちて、それからそれへ、山また山、次第に峰が重なって、段々雲霧が深くなります。」
(72頁)

百年以上経った今でも、この風景は大して変わっていない。真下の路を通る汽車というのは、横須賀線のことだろう。お囃子が聞こえるのは、逗子駅とは反対方向ということなので、ここで言う「一方」というのは「海の方」とは反対側、つまり鎌倉方面を指していると思われる。お堂に向かって左側に、「一谷落ち」た方に向かうと思われる細い山道が出来ている。小さな裏木戸があり、その脇には、一坪ほどの道しるべと思われる石塔が立っているが、すっかり風化して彫られた文字を読み取ることは難しそうだ。そこは、逗子と鎌倉を隔てる丘陵の尾根筋になっていて、確かに「一谷落ちて」いる・・・と

えないので、雲霧の中からやって来たと言われれば信じてしまいそうな所である。「男」が消えていった道なので、そこから女が出てきても不思議ではないということなのか。考えようによっては、蜥蜴に続く第二陣の出現ということだったのかもしれない。

作品では、祭り囃子に導かれた男は、けもの道を進んで行った先で少し広くなった所を見つける。そこには、祭りの舞台が用意され、そこに玉脇みおの姿を認め、さらに、みおと背中合わせに座っている自分自身の姿も認めるというのである。これは、「自己像幻視(ドッペルゲンガー)」と呼ばれる現象である。男は、完璧に異界に入っているということなのだろう。当然のことながら、男のこの不思議体験は、相手の女にも感応たと思われる。みおは人妻である。好きなときに会うという訳にはいかない。恋しい女に会うためには、自己像幻視を体験したお祭りの舞台に向かなければならないと考えた「男」は、再び魔界への路を辿る。そして、彼が最後に目撃されたのは、「蛇の矢倉」であるという。

「蛇の矢倉」と言うのは、この裏山の二ツ目の裾に、水

いうより、足下から急峻な斜面になっていて、今では、真下にまで新興の住宅地が迫っている。その先には山が望めるので、「山また山、次第に峰が重なって」というのは、ここから眺めた風景だったのだろうと想像する。「春昼」に仕掛けられた細工の一つは、裏木戸から出た先に続く細い山道は、異界へと続く道だったということである。「男」は、その道を辿って行って「女」と逢い、二度目に出て行った後、その先で姿を消したのだった。

私たちが、風化した道しるべの文字を読もうと試みてみると、「山また山」に続くと思われる方から、白いブラウスに黒のスリムなパンツルックの若い女性が一人やって来ると、慣れた足取りで裏木戸に入り、寺の中に消えていった。私と妻は、思わず顔を見合わせたのであった。幻を見たような気がしたからである。たとえこれが駅へ出るための近道だとしても、若い女性が一人で歩くような道ではない。いや、若い女性一人どころか、私だつて一人だつたら、ハイキングでもこんな寂しいところには来たいとは思わない。狭い山道で、雨が降れば道端の草で足が濡れるような所である。彼女は、どこからやって来たのだろうか。その先に家があるように見

のたまつた、むかしからある横穴で、わツというところ、おうーと底知れず奥の方へ十里も広がって響きます。水は海まで続いていると・・・」(84頁)

地図をよく見ると、岩殿寺から、鎌倉方面へ「一谷落ちた」所には名越溜池と呼ばれる小さな池がある。その先、住職の言う「裏山の二ツ目の裾」辺りには、「まんだら堂やぐら群」と記された奇妙な場所がある。「やぐら」は「谷倉」には、山腹に作られた横穴式の墓という意味がある。まんだら堂のやぐらは、一三世紀頃から一五世紀頃にかけて使われていた古い墓地ということだ。鏡花は、手前にある名越溜池とこのやぐら群を組み合わせて「蛇の矢倉」を創作し、作品に利用したのではあるまいか。ネットの写真を開いてみて、この少し平らになった所なら、祭りの舞台が設えられても不自然ではないし、「男と女」以外の役者を異界の住人たちとすれば、いや、すでに「男」も「女」も異界に入入りできる人間になつてしまっているとすれば、すべてがうまく治まるように思うのである。

住職の話聞き終えた散策子は、来た道を戻る。途中、

駅の方からにぎやかな音・声が聞こえてくるという件がある。逗子駅の駅舎改築の完成を祝う行事に伴う催しとのことである。逗子駅の開業は、明治二十二年であり、岩殿寺への散歩は、明治四十年前後のことなので、開業から二十年ほど経過している。傷んだ所を修復したのだろうか、利用客が増えたために、増改築が必要になったのだろうか。

散策子が、青大将の行って行った屋敷前まで戻って来ると、女が待っている。小野小町の歌に自分の思いを託した玉脇みおである。蛇の侵入を教えてくれた散策子にお礼を述べるのが目的だったが、ちよつとした言葉の行き違いから、「男」のことそして自分の恋心について、当事者の口から語られることになる。これが「春昼後刻」の内容である。

「春昼後刻」の散歩も出来なくはないが、青大将と棟蛇と蜥蜴に迎えられ、蛇の矢倉で一区切りをつけた「春昼」のみで散歩を切り上げ、次の目的地を目指そう。ああ、その前に・・・

逗子と言えば・・・

が観たのは後の方の作品だろう。

逗子から江ノ島に手こぎボートで向かった少年たちが（歌詞に、「帰らぬ十二の 雄々しき御霊に」とあるので、少年たちは十二人いたようだ）、天候の急変に遭い、全員遭難死するという話だった。映画は、江ノ島の病院に入院している憧れの先生に会いに行くというようなストーリーだったと記憶しているが、他の映画と混同しているかもしれない。

クライマックスが近づき、少年たちの漕ぐ船が、嵐に見舞われる木の葉のように弄ばれるのを見ながらハラハラドキドキして、一緒に見ていた友人と、「大丈夫かなあ」「船は、沈んでしまわないかなあ」などと話していると、近くにいた中学生か高校生くらいのお兄さんが振り向いて、「なんだ、知らないのか？あの船は、沈んで、みんな死んじゃうんだ」と、聞きたくはない話の先を暴露してくれたのだった。

遭難事故は実際にあったこと、犠牲者は逗子開成高校の生徒たちだったということを知ったのは、ずっと後になってからのことだった。それ以来、ズシカイセイコウコウという名称と「真白き富士の嶺」の歌詞が、抽象的に頭の中で結びついているのである。

逗子の地図を眺めていて、突然思い出したことがあった。引き金となったのは、逗子開成高校の名称である。個人的には縁もゆかりもない学校である。入ったこともなければ、見たこともない。その教員や出身者を知っているわけでもない。

逗子開成と聞いて思い出したのは「真白き富士の嶺」である。歌は幾度となく耳にしてきたので、歌詞の断片は覚えているが、思い出したのは歌より映画の方である。

小学生の頃、毎年夏休みになると、学校の校庭や地域の原っぱで、納涼映画会が開催された。まだ、テレビはそれほど普及しておらず、納涼映画会は、地域あげての夏の楽しみの一つだった。誰が主宰し、誰が準備をしたのか、親も子もよく知らなかった。暗くなるまでに、会場に、鯉のぼりを揚げるような竿が二本立てられ、その間に大きな白い布が張られて、即席のスクリーンとなるのだった。さしずめ、今でいうドライブイン・シアターである。ただし、観客は車ではなく、歩いてやって来た。

「真白き富士の嶺」を観たのは、何年生の頃だったろう。ボートの転覆事故があったのは明治四十三年のこと、昭和十年と二十九年の二回、映画化されている。私が小学校に入学したのは昭和二十九年のことだから、私

逗子から次の散歩地、葉山へ向かう途中で、少し道草をすることになった。

「太陽の季節」そして、あるモットーについて

逗子から葉山方面に向かう途中、国道134線が渚橋を渡る手前の砂浜に、「太陽の季節」の碑が立っている。碑に刻まれている「太陽の季節」ここに始まる 石原慎太郎の文字は著者の直筆だろう。碑の上部には、誰が見てもそれと分かる、岡本太郎の手になる黄金の太陽の彫り物があしらわれている。少し先の海上には江ノ島、さらにその先には富士山が見えるようなロケーションである。

小説は、昭和三〇年（一九五五年）に文芸誌に発表され、その年下期の芥川賞に選ばれたということだが、私は小説も読んでいないし、翌年に公開された映画も見ていない。昭和三〇年といえば、私は小学校に入学して間もない頃であり、まだまだ、アトムや鉄人に心奪われていた頃である。この作品及び映画のことが理解出来るようになった頃は、小説としてよりは、「慎太郎刈り」や「太陽族」といった風俗現象として注目されていたよう

に記憶している。風俗現象というよりは、不良少年のこ
とを扱った作品で、よい子たちの近づくものではないと
いうのが一般的な受け止め方ではなかったか。

当時のことを調べていて、小説そのものよりも、この
小説を巡る文壇の動きの方に興味を覚えた。文学賞の選
定に際して、伊藤整や井上靖が賛成し、平野謙、吉田健
一、佐藤春夫らが反対したとのことである。

伊藤整の賛成は、分かるような気がする。伊藤は、石
原と同じ一橋大学の出身であるとともに、当時、彼はチ
ヤタレイ裁判の最中であって、「徒に性欲を刺激する」
だの「正常な性的羞恥心」「善良な性的道義観念」など
を盾に追及してくる検察と烈しく戦っていたはずである。
そうした立場上からも、「太陽の季節」は、当然擁護し
なければならぬ作品だったのだろう。

また、吉田健一の反対というのも、私には面白かった。
吉田は、一九六五年（昭和四〇年）、一八世紀半ばに英
国で出版された「フアン・ヒル」の翻訳を河出書房か
ら出版したが、猥褻を理由に発禁にあっているはずであ
る。英国でも米国でも、出版されるとすぐにこの本は発
禁処分を受けており、我が国でも例外ではなかった。現
在流通しているのは、一部を削除・改訳して再版された

ものである。幸いなことに私の手元には、一九六五年発
行の、貴重な初版本がある。入手したのは六七年のこと
なので、初版が発禁になった後、在学していた大学近く
の古本屋で見つけたものである（裏表紙の見返しに、今
は無き國分寺書店のシールが貼られている）。「太陽の
季節」についての吉田の言い分は知らないが、要は、内
容が性的であるかどうかではなく、作品として文学的か
どうかが大ごとということなのだろうと思った。

渚橋を渡ったところで、国道134号線と分かれて、海岸
沿いを走る県道207号線に入り、葉山御用邸を目指して行
くと、途中の森戸大明神の先に、「石原裕次郎記念碑」
がある。沖に浮かぶ葉山灯台には、裕次郎灯台のニック
ネームがついているが、いつ頃から、なぜそう呼ばれる
ようになったのかは知らない。

裕次郎は、「太陽の季節」に出演しているようだが、
正式な俳優としてではなく、たまたま兄の作品の映画化
の現場を見に行つて、制作に当たっていた水ノ江瀧子に
声をかけられてのことと聞く。そして、この映画に出演
したことがきっかけで昭和の大スターへとなっていくの
だから、人生何が幸いするか判らない。

のだった。

彼は、年賀状に、「人生の幸せは後半にあり、を实践
中」と書いてきていた。定年退職すると、それまでの仕
事とは一切関係のない、河川敷にあるゴルフ場にゴルフ
アーを運ぶための渡し船の船頭という異業種に身を投じ、
やりがいを感じると言っていた。異業種ではあったが、
ヨットマンの彼にとつて、船つながりという点では一貫
していた。しかしながら、幸せな後半の人生は束の間の
こととなってしまった。二年前の暮れ、不慮の交通事故
で帰らぬ人となってしまったからである。彼は、私の拙
い文章の、数少ない読者の一人だった。改めて、ヨット
マン小谷氏の「冥福を祈る」。

「草迷宮」―横須賀・秋谷（あきや）―

今回、この執筆のために読み直すまで、「草迷宮」の
舞台は、葉山とばかり思っていた。その理由の一つは、
「三浦の大崩壊を、魔所だ」という。葉山一帯の海岸を屏
風で劃った、桜山の裾が・・・」（8頁）という書き出
しがあまりにも印象的だったからである。その見かけか
ら、「大崩壊」は長者ヶ崎のことを言うのだろうと考え、
その周辺が舞台だったと思ひ込んでいたわけである。ネ

私は、裕次郎の映画もほとんど観ていない。小・中学
校の同級生の中には、裕次郎はじめ、小林旭や宍戸錠な
どが演じる日活アクション映画にはまっている友人もい
たが、兄や姉の影響を受けてのことだったような気がする。
それとも単に、私が奥手だったということだろうか。

石原慎太郎で思い出したことがあった。

今回の散歩コースを三浦半島の先端に向かって進んだ
所に、油壺と呼ばれる小さな湾がある。外海から二重に
奥まったような地形になっているので、その名前の通り、
油を流したような静かな湾である。都会から近いことも
あって、そこは有名なヨットハーバーになっている。

三十年ほど前、ヨットマンだった知人が仲間と共同所
有しているという船に乗せてもらうため、出かけたこと
があった。

湾の奥から外海に出るためには、湾内に停泊している
何隻ものヨットの間を通り抜けることになる。素人目にも
一見してその豪華さが見て取れるスマートな青いクル
ーザーの前を通り過ぎようとしたときであった。知人は
すかさず、その青いヨットの持ち主は石原慎太郎で、船
名はコンテッサ（伯爵婦人）というのだと教えてくれた

ット情報によると、「大崩壊」は長者ヶ崎から三浦半島を少し先の方へ行つた久留和漁港辺りまでの、かなりの広範囲を言うようである。確かに、地図を見ると、海岸通りから少し内陸に入った所に「大崩」の地名が記されているので、長者ヶ崎そのものを言うのではないというのが正しいのかもしれない。しかしながら、作品には、「大崩壊の絶頂は薬研を俯向けに伏せたようで・・・」（10頁）とあり、これはまさに長者ヶ崎の景観そのものである。鏡花は、長者ヶ崎を大崩壊と認識していたのではなからうか。

物語の舞台は、旅の僧が足を休めた長者ヶ崎近くの茶店から国道134号線を相模湾に沿って2kmほど行つた秋谷海岸まで、もう少し厳密に言えばそこから高台を少し登つた所にある屋敷（現存する若命家長屋門）までである。なお、作品には、相模湾に沿つた道路は、国道134号線ではなく三崎街道と記されているが、現在の三崎街道は京急線の三崎口駅方面から半島を北上してきて、陸上自衛隊武山駐屯地の前でほぼ直角に右折し、海から遠ざかるようになっていて、秋谷海岸の方へは来ていない。作品の中で三崎街道というのは、地元での通称か、昔はそう呼ばれていたものの、道路整備に際して呼称の変更がある

ヶ崎を見下ろすようにして建つホテルのレストランで、遅めの昼食をとることにした。海岸通りを逸れ、急峻な坂道を登つて車寄せに車を着けると、係の男性がやつて来て、車はホテルで管理するというので鍵を預けることにした。ホールを通り抜けてテラスに出ると、爽やかな海風が吹いていた。昼食にはやや遅い時間にも拘わらず、七、八割のテーブルが埋まっていた。

目の前には秋の午後の日差しを浴びた相模湾が広がり、真正面には伊豆大島の島影が青く霞んで見えていた。ロケーションといい、室内の設えといい、周りに日本人がいることを無視すれば、ここが日本であることを忘れてしまいそうな佇まいであった。

何の予備知識もなく飛び込んだホテルだったので、帰つてからどういふ特徴のある施設なのか調べてみると、「南仏コートダジュールを彷彿と・・・」というキャッチコピーが目にとまった。「なるほど南仏か！」と思つたものの、よくよく考えてみれば、コートダジュールにもニースにも、まだ行つたことはないのだった。

南仏もいいのだが、まだ三浦半島の散歩が済んでいない。鏡花の世界に戻ることにしよう。テラスから西方遠くに富士山が霞んで見えていた。そ

つたということなのだろう。

いつまでも間違つた地理で理解してはいけないので、地図を広げ、ネットに展開されている情報を確認しながら再読してみたが、物語と実際の地理・地名との間にはややズレがあるように感じた。もちろん、「草迷宮」はフィクションである上に、幻想・怪奇と呼ばれるジャンルに属する作品であり、しかも百年も前の作品ということもあって、前述の三崎街道の呼称に象徴されるように、そこに現在の地図を押し当てては意味のあることではないかもしれないが、どこかに鏡花の足跡を見つけられないかと思うのである。

僧が立ち寄つたとされる茶店は、当時は実在していたものなのか、それとも鏡花の創作によるものなのか定かではない。作品には、「・・・江の島と富士とを、簾に透かして描いたような、一寸した葎實張の茶店」（11、12頁）とあり、その具体的な書き振りから、実在したものであるかと考えるが、架空にしろ実在にしろ、この記述から、そのおおよその位置を推定することはできる。

逗子で少し時間を取りすぎってしまった私たちは、長者

して富士を見ていた視線を手前に移すと、江ノ島が視野に入つて来る。富士と江ノ島・・・旅の僧が茶店の葎實越しに見ていたのは、まさにこの光景ではなかったか。もっとも、茶店が高台にあつたとは考えられないから、それは長者ヶ崎のつけ根にある駐車場辺りから少し葉山の方に寄つた海岸沿いにあつたと考えるのが妥当だろう。

散歩の後半は、そこから国道134号線を三浦半島の先端方向に向かうことになる。

作品の中で、地名に言及されているところを探っていくと、まず「秋谷明神」に行き当たつたが、実際にはその名前の明神様はない。当初、これは後半の舞台となる「屋敷」近くにある「秋谷神明社」のことかと思つたが、それだと、物語の展開とやや辻褃が合わないような感じがしたので、調べてみると、ずっと手前、昼食を取つたホテルから数百メートル先にある「熊野神社」がモデルだということ。確かに、それなら話の展開は不自然ではなくなる。

「秋谷明神」は、物語の展開に関わる重要な場所なので、当然のこととして、熊野神社にも立ち寄るつもりでいたが、車のキーを預けた係の人に聞くと、近くに駐車

場はないとのことだった。そこで、神社のすぐ下にある、古くからの子宝信仰の象徴となっている子産石（横須賀市文化資産）の前を行ったり来たりして車が停められそうな場所を探したが、係の人の言うとおりの子産石について、茶店の老婆は旅の僧に、こんな風に語っている。

「・・・子産石と申しまして、小さなのは細螺、碁石ぐらい、頃あいの御供餅ほどのから、大きなのになりまして、一人では持切れませぬようなまで、こつとりと円い、些と、平扁味のあります石が、何処からとなくころころと産れますでございます。

その平扁味な処が、恰好よく乗りますから、二つかさねて、お持仏なり、神棚へなり、お祭りになりますと、子のない方が、いや、もう、年子にお出来なさりますと、申しますので。・・・」（17頁）

道路際に祀られている子産石は、直径一メートルはあろうかと思われる大きさで、その形は扁平ではなく球形なので、老婆が言うものとは、ずいぶんと趣が異なる。この石がいつからここに置かれるようになったのか、調べ

だが、久留和と秋谷の間には、山が海岸まで迫ってきていて、現在、立石公園の一部となっている「梵天の鼻」辺りを境に、二つの集落の間には物理的な距離以上の隔たりがあったものと想像する。

その立石公園に、「草迷宮」からの一文を取った石碑が置かれていた。

「大崩壊の巖の膚は、春は紫に、夏は緑、秋紅に、冬は黄に、藤を編み、葛を絡い、鼓子花も咲き、竜胆も咲き、尾花が靡けば月も射す」（11頁）

これは、先に引用した、「三浦の大崩壊を、魔所だという」の少し後の文章である。見事な赤茶色の御影石に彫られた文章であるが、その前で立ち止まって読もうとする人は一人もいなかった。多くの人は、石碑には背を向け、海面から突き出すように立つ立石の方にカメラを向けていた。海辺の駐車場はほぼ満車で、大半はこの夏最後のサーフィンを楽しみに来ている人たちの車のようだった。

「草迷宮」では、屋敷（別宅）の近くを流れる川が、

てみたが判らなかつた。

後半の、つまり、この作品のクライマックスとなる舞台は、子産石からもう少し先に行つた秋谷海岸近くの屋敷（別宅）である。この屋敷の持ち主である鶴谷家は土地の有力者ということで、その本宅は、明確には記されていないが、この熊野神社の近くにあるという設定と考えてよさそうだ。そう考える根拠の一つは、登場人物たちが件の屋敷に大分近づいたところで、「本宅から約八丁（約1km）」と言っていることから逆算してのことである。

その屋敷というのは、鶴谷の先代が、自分たちの隠居所として使うために手に入れたものである。ひよんなことから、そこに息子夫婦たちを住まわせることになつたが、そこから立て続けに五つものお弔いを出させることになり、それが魍魎魍魎が跋扈する怪しげな話の伏線となつている。

おそらく、熊野神社や久留和漁港あたりが集落の中心部であり、そこに土地の有力者である鶴谷の本宅があるとするのは自然なことである。そして、主要な舞台となる屋敷（別宅）は、隣の秋谷集落に位置するという設定その屋敷と共に重要な舞台設定となつている。

屋敷に逗留している葉越明（はごしあきら）が、この物語の主人公である。彼は、豊前・小倉の生まれで、幼い頃に死に別れた母親が唄っていた手毬歌を求めて、諸国巡りの旅に出、この地にたどり着いたという設定である。彼をこの地に誘つたのは、母親の知人の菖蒲（あやめ）と呼ばれる女性である。元々素性のはつきりしない女性で、故郷では神隠しに遭つたということになっていく。葉越明は、旅の先々で幻のような菖蒲の姿を認め、ここまで追ってきたのである。そして、彼はこの地を流れる小川で、綺麗な手毬を拾う・・・。

「・・・この間一名も嬉しい常夏（撫子の一種）の咲いた霞川という秋谷の小川で、綺麗な手毬を拾いました。」（129頁）

ところで、「秋谷の小川」は、どの川をモデルにしたものだろう。

「・・・この一巻きの布（川）は、朝霞には白地の手拭い、夕焼けには茜の襟、襷になり帯になり、果は

薄^{すすき}の裳^{もも}に成^なつて、今もある通り、村はずれの谷戸^{やとぐち}口^{ぐち}を、明神下のあたりから次第に子産石^{こうまいし}の浜^{はま}に消えて、何処^{どこ}へ灌^{そそ}ぐということもない。(中略)その川裾^{かわすそ}のたよりなく草に隠れるにつけて、明神の手水洗^{みたらし}にかけた献燈^{けんとう}の発句^{はくご}には、これを霞川^{かすか}、と書いてあるが、俗に呼んで湯川^{ゆかわ}という。」(73頁)

この文章から川の在処を特定する手掛かりを探すとすれば、「村はずれの谷戸口」「明神」「子産石の浜」あたりであろう。明神を、秋谷明神とすれば、それは、実際は熊野神社であり、川はそのあたりから地下に消えてしまい、その先は子産石の浜ということになる。そして、秋谷明神の手水洗にかけられた献燈には、「霞川」は俗に「湯川」と呼ぶと書かれていることだが、モデルとなった熊野神社の近くには、霞川の名前も湯川の名前も見当たらない。ただ、地図を拡大してみると、熊野神社の近くまで山の方から下ってきた小川が、国道の手前で暗渠になってしまっているのか、地図上では消えてしまい、国道を越えた砂浜の所で再び姿を現すようになっているのが認められるので、これが霞川のモデルだったのかも知れない。

しかしながら、「明神」も「子産石の浜」も村の中心部に位置するという設定ならば(私はそう考えたが)、「村はずれの谷戸口」とは矛盾することになる。これは、「川は、村はずれの谷戸口から流れて来て、明神下で暗渠に入り・・・」と理解すればいいのだろうか。こう考えれば矛盾は解けるが、不自然な地形になってしまうように思うのである。なぜなら、先に引用した川の説明のすぐ後で、地元の人たち三人が、鶴谷家の本宅から秋谷の屋敷(別宅)を目指すという場面があり、こんな風に書かれているのである。

「・・・鶴谷が別宅のその黒門の一構^{ひとかまえ}。

三人は、彼処^{かた}をさして辿るのである。

ここに渠^からが伝う岸は、一間^{けん}ばかりの川幅であるが、鶴谷の本宅の辺りでは、凡そ三間^{さんげん}に拵^ぢがつて、川裾^{かわすそ}は

早やその辺りからびしよびしよと草に隠れる。

此処^{こゝ}へは、流^{なが}をさかのぼって来る・・・」(74頁)

要するに、川は、高台にある別宅近くから、海辺に近い本宅の方に流れ下っていて、上流の川幅は一間、下流では三間ほどになっているという設定である。先にも指

摘したように、本宅から別宅までは、約一キロ(約八丁)あることになっている。本宅があると想定した熊野神社近辺から別宅のモデルとなった若命家の長屋門までは、一キロ強なので、距離的には問題はない。しかしながら、その間に川を通すとすると、斜面を斜めに横切ることになるので、これはあまりに不自然である。しかも、現在の地図では、川幅が上流で一間、下流で三間となるような川は見当たらない。霞川は、鏡花の創作した川というのが私の考えである。

霞川で手毬を拾った明は、それは自分が探し求めている女(菖蒲)が弄^もんでいたものであり、手毬の浮いていた川を遡^さって行けば彼女に会えるに違いないと考え、屋敷に逗留^{とちゆう}することになったのである。

しかしながら、この屋敷は、五つもの弔いを出した家であり、妖怪たちが出没する異世界だった。地元の猛者が何人も、妖怪退治に馳せ参^まじるが、畳が浮き上がり、行灯が暗闇に浮遊^{うきう}するのを目の当たりにして、怖じ気づいてしまうというところである。旅の僧が引き留められたのは、さまざまの仏の回向をするためであった。葉越明が、探し求めていた菖蒲に会えたのかどうか、

イリュージョンのような妖怪と旅僧とのやり取りがどうなるのかは、原作を読んで頂くとして、最後の散歩地向かおう。

屋敷のモデルとなった長屋門は、固く閉ざされていて、中をうかがうことはできない。それは当然のこと、こゝは、公共の史跡ではなく、若命家の現役の住まいなのだから。

屋敷に隣接する「秋谷神社」が、散歩の最後の目的地である。長屋門脇の急な石段を登って行くと、嫌でも屋敷の中が目に入ってくる。この中で、葉越明と菖蒲、妖怪と旅の僧が対峙したのかと思うと、興味をそそられるが、先述のように、中に入ることはできない。

その若命家の庭を横目で見ながら、石段を上って行った先に本殿があり、そこに掲げられた扁額には「秋谷神社」と書かれていた。一瞬、「秋谷明神」と読んだが、それは思い込みのなせる技だった。神社の一面に、ここをお参りするための道順と方法が示されていたので、それに従い、本殿の裏側では羽目板をトントンと叩いて、ここに来たことを神様に知らせながら一回りして、帰途についた。

参考文献

- 「現代日本文學大系5」(筑摩書房)一九七二年
「季刊マーメイド 第2号」(逗子市立図書館)二〇一三年
「逗子より」(鏡花全集 第二八卷 岩波書店)一九八八年
「春昼・春昼後刻」岩波文庫 一九八七年
「草迷宮」岩波文庫 一九八五年